

寿
賀

1963.10

No. 4



昨秋、山元教宣部長が機関誌発行を計画した折、多数の応募原稿が寄せられた」と「仄聞していたので、大きな期待をかけていた。

筆者としては折角自分が心をこめて書き上げた原稿が、単に予算が無い、等と云う一方的理由のもとに「没」にされてゆくのは、たとえようもない程に腹立しいものである。

私が教宣部長を引受けた最初の仕事として計画したことはこれら日の目を見られなかつた皆さんの心からの声を「発刊したい」と云うねがひだつた。当時私も山元君に請われて拙文を投じたものである。我々労働者の原稿はその巧拙を問うものでない。怪奇とも云うべきこの世代に生き抜かんとして力のかぎりを尽すものの良心のさけびであり、ねがひであるからだ。

前任教宣部長から受け継いだ応募原稿を一見して、余りにもその僅少なのに驚いたのである。最初の計画では旧稿だけで組上げたいと希望していたのだけれど「小品数点」これではどうに

もならないのである。想いをあらたにして「新鮮」な息吹きをたえたもの「もちろん旧稿は全部掲載」を発刊することが出来たらどんなに素晴らしいだろうか、と想つたことである。スト以前の亜鉛支部と以後の支部そうしたこととも興味ある問題であるかも知れない。そこで教宣部会にはかつてみた処、今後はそんなむづかしいことより楽しめるものを作ろうと云うことになつた。固い事は抜きにして、書く楽しみ、読む楽しみ、景品が当る楽しみ、そうした吾々の心の糧となるような、機関誌を通じてみんなの心が一つにむすばれてゆくようなそんな春雷が出来たらどんなにたのしいことであろう。

竜頭蛇尾に終つた感じですが、ここにつつがなく皆なの「春雷」を刊行出来ました事を衷心より御礼申し上げます。

委員 長 挨拶

今度第五回定期大会に於いて役員の改選があり、はからずも私が当支部の代表者として選ばれました事を厚く御礼申し上げます。

役員選出には種々問題がありました。が最上の方法又は支部独自の体制等あらゆる角度から検討し、この策を採り入れた次第で、この事態が正規のルールに外れておりますが、みな組合をよくしたいのが念願でありましたし、これを諒解下さいました皆様方に深く感謝する処であります。

御存事の通り浅学劣才の私が到底この大任を果し得るかは一に皆様方の絶大なる御支援が無ければ到底望むべくもありません。

過去色々な形で進んでまいりました当組合もこの事の大障害に直面、皆様方の福利と生活の安定向上を目指した闘いが斯る大きな傷跡を残し、あまつさえ皆様方に不安と犠牲を与え、尙企業に迄累卵の機危に追いやつた事實は返す返すも残念な事です。組合員一人一人が過去のいがい経験を土台に、真に我々の

幸福は何か、生活の安定或は向上は何か、深く掘下げて充分認識する時期が来た事と思ひます。

ここで我々は緊禪一番過去失われた実績と対外信用を取戻す事が緊急な要務であり、そりする事によつて過去の生活水準が維持されるものと確信する次第です。

又一面企業組織は今全勢力を集荷に傾注している状態の中でここで労使が一体とならなければ事業の再建或は局面打開は到底望めない現状です。

よい品物を早く、をモットーに一歩一歩御得意先の要望に応え、信用挽回に努力する事が即両者の繁栄をもたらすものなれば何も躊躇すべき時期でもなく勇気をもつて進むべきだと思ひます。外には貿易自由化、内には企業間の熾烈な競走、少くとも相手方は合理化も一段と促進されるであろう事は火を見るよりあきらからず。

この中で我々の企業の実態を注目すべき時は今です。昔は権力者がこの勝利を得たが、現在はやはり運営と資本が大きくこの全企業を支配する時代です。

要は我々の企業大阪亜鉛を業界の落伍者にさせぬよう我々の力で守り通す事が我々の任務でもあり責任でもあるのです。

今日組合が直面している課題はきわめて大きいものがあります。

我々はこのような情勢を真剣に検討し、いたずらに政治闘争に当る事なく身近な経済問題の解決に努力すると共に企業発展に占る自己の役割と責任をさらに強く自覚せねばならぬ時です。私は決して組合本来の闘争や主張を緩和せよとは云いません。物価の上昇の荒波に対し組合員の利益を守るために今こそ組合は強くならねばいけないのです。

ただ私の云い度い事は、新しい内外の情勢に対して組合運動もこの際あらゆる飛躍をして、これに対応すべき勇氣と英知をもつてもらい度いと思ひます。私は諸君が良識をもつて常に常識的に現段階を理解するなれば必ずや我々の生活は安定し向上がもたらされ、共に企業の発展につながると確信する次第です。

38
・ 9
・ 12

村上 幸次郎



日曜日の溜息

いつものように夜ふかしをし
いつものように朝寝して

やつと目の覚める頃は

目覚し時計が十一時を指している

それから煙草に火をつけて吸うでもなしに煙を吐く

読むでもなしに新聞を拡げしてみる

これが僕のいつもの日曜日なのである

時たま僕は風邪を病み

その時は疲労の固りに泣き

日曜日の不順を悔う

しかし今日は身心共に快適だ

だから僕は横着にして

朝寝の心地よさを味わう

誰も僕の朝寝の邪魔をしない

風鈴は僕のスースーとした朝寝顔を

枕元で愛美し

額をなでるが如く 優しくささやいてくれる

僕はそこでとる手もなしに

心地よく

日曜日のため息をつく

一 組 合 員

再 建

今年の春斗中スト突入以前のことでつたが「頭の古いオッサン達云々」と、さながら年長者を「ブジョク」するような、敵視するような「アジピラ」とも云うべき壁新聞が食堂の壁面を我がもの顔に大きく占領していた時期があつた。偏狭にして粗雑な文意を感じて全文を読む気にもなれなかつたので深く記憶もしてないが一見した瞬間、自分の属する支部の最も恥ずかしい一面を「ムキダシ」にしてみせつけられたような気持がして大いに「ヒンシユク」したものである。総員僅か三〇〇名の少人数、しかも無理をすれば全員が一堂に会することも容易な恵まれた環境にあるにも拘らず充分な討論をすることもなく、一部の青年層が「オッサン達」を敵視する不幸な事実がはからずもここに露呈されたのである。さて、私は古い、新しいの定義は知らないが、或いは野菜とか魚肉類のような謂所青鮮食料品なら市場に提供された瞬間からの時間を数えることで、その「新しいもの」「古いもの」を決めることが出来る

だろうけれど、吾々生きている人間はものを考え、創造する「力」をもっているのである。

老幼の別ならとに角、古い、新しいをたんに年令だけで決めるのは少し早計ではないかと私は考えている。

人間としても生きておるかぎり自己の持つ思想を、或いは持性を、より正しいものえ、より高いものえと発展させるべく一日一日の生活に感動をもつて臨み、精進を続ける人達はその年令が六十才であろうとも「現代に生きる」価値高き青年としての資格があるのではないだろうか。

他面年令の点ではたしかに青年であるのに、一分の向上心も持たず、自己認識さえも「客観的にはあるが？」うたがわれるような連中をみるとき、彼等こそ「老廃物」であると公憤を覚えるのである。

「閑話休題」前述の一部青年層の「年寄のオッサン達」えの感情は期せずして派を成さしめたのである。各々同僚の士は相求めざるをえないと云う方向へ追いやられる結果を生んだのである。一部過激派の斗いを有利に導かんがための努力であろうが、一部指導層は自己の意に反する発言に対してはそれを助長する度量を持たず、その瞬間にこれらの意見を粉砕

せんとして総力を集中するか、の如き様相を呈したものである。吾々人間は誰でも自分が考えていること、自分がしようとしていることが一番正しいのだと、そのとき信じている。それだからこそ行動が出来るのである。だがしかし完全な人はいなかろう。

一応は自分以外の人の言葉にも卒直に耳をかたむける余裕をもたなければならぬ。自分とは全く反対の思想をもつていると思われる人達とは充分に討論を尽すべきである。そこからよりよき「みちしるべ」道標が見出されるのではなからうか。

俺達は労働者だ。企業のことなんか考える必要はないんだ。俺達には生活を守る権利がある。再生産に必要な最低の要求だ。支払能力は企業の責任であり、俺達の心配することではない」と、この理論は正しいことであるが「他面」俺達が現実生活している社会は資本主義社会であり、その群雄割拠する資本の中の名も無き弱少資本に生活を依存している俺達が骨肉相食む斗争を繰り返しては俺達も企業諸共社会から葬り去られてしまふ、と憂慮するのも又正しい事であると思う。この両者が話し合うことによつて妥協点を見いだしてゆく努力を怠つてはならぬ。

今後の課題としては職場の民主化に徹することだと思ふ。自分の考えていることを「かろい気持」で自由にだれとでも、またどこでも話せるような環境にすることだ。特定の支配者はいらぬし「労働貴族は絶対にいらぬ」しかし「リーダー」は必要だと思ふ。個人の意図するものでなく、大衆の意志の中から自然に生れてくる真のデモクラシー的リーダーこそ最善のみちしるべ（道標）をみつけだすことだろ

う。
再建と云う言葉は意慾に満ちて勇ましくも美しい。だがその実体は最高に苦しいものだ。吾々は今こそ「再建」と云う名のイバラの道を歩んでいるのだ。一切の困難に耐えて頑張り抜こう！
俺達は誇り高き組織労働者！！

1
9.
s 3 8
教宣部長



つづり方

アンモニアの白煙流れ去る彼方

小笠 九条住男

長い春の斗争もすぎ、そして暑い夏の日もいつしか立秋と共に去つて颯雲流るる秋が来たが我が小笠では未だに扇風機がホコリとも風とも判らんものをかき廻してうなつておる。釜の位置が建物が町工場時代そのまま熱作業向きでないからで平常大阪に多い東の風の時は川鉄製品工場が西の風の時は洗浄工場が丁度屏風の役目をして僅かに北風の時だけ重油タンクの角からすき間風のように現場に吹込む。私達はこの北風を待ちわびるのだ。特に私は北の風の吹くのを待つ。それは遠くオホツク海を渡つた北の風が北海道の鈴蘭の草茂げる丘にねむる母の香りに乗せて来て、汗ばんだ私の肌にくれて僕が振つたアンモニアの白煙と共に南の空高く流れ去るからだ。アンモニアの白煙消え行く南の海、そこには夢にまで見る父が乗つていた航空母艦千代田と共に水漬くかばねとなつてゐるのだ。大東亜戦争、それまで幸

福であつた僕の一家は父の召集、そしてその父は赤道下の南十字星輝くソロモン海峡の夜戦の時米海軍の集中火砲を浴びて艦と共に赤道海流の底深くのまれて散つて行つた。そして終戦名譽の家の母と子はインフレと飢餓の街頭に放り出された。幼い私を育てるため余り丈夫でない母がソーラン節の鎌の漁場や熊の出る狩猟の山奥に迄行商に行つたが馴れない仕事に無理が生じて目も凍るような雪の夜、私の頭を撫で乍ら父のように権力に屈せず、正しく生きて行けと云つて父の許に旅立つてしまつた。大人でさえ生きて行く事の困難な終戦直後幼い孤児の私は近隣の人の情でリングとスルメをかじり乍ら津軽海峡を渡りストロブの消えた寒駅の待合室に寝たり貨物列車に乗つたりして一路南下、唯一の肉親の祖母が住む能登半島に今思つてもどうして辿りついたか判らない。ここではイモをかじり乍ら今東京キュバンにゐる見砂と祖母を共にして蝶々やトンボを追廻し、秋の山に行つては渡鳥を捕えては成長した。祖母はお前も父ちゃんの子供の頃と一緒やお、と目を細めていた。それから幾春秋可愛がつてくれた祖母も世を去り春の野の雑草のように踏まれても踏まれても伸びては生きて来た私を大笠の折戸組長に

拾われて大阪に連れて来られ大阪垂鉛の一員となつたが夏の小笠の通称トルコ風呂のような作業場には閉口した。今年こそ脱出しよいかと目にしむ汗をふく時父が戦かつたソロモン海峡そこは濠州航路の道で無風と炎熱焼くが如きで有名な所だと捕鯨船に乗つてゐるイトコから聞いていた。その炎熱の海の彼方からまぶたの父がなんだそれ位の事で弱根を吐くなと叱たして来る。弱根でないのだオヤジ釜の位置をを考え建物を高熱向きにしてくれたら何十人かの先輩同僚が脱出して行かず生活苦と斗い乍ら欠勤する仲間も少くなく成ると思ひ小笠を農家の物置き小屋のようにして置き乍らパイプ部門だけドシドシ設備投資されて行くのを見てると経営者にレジスタンスを感じるのだ、父チャンと叫びたくなる。赤トンボがスイスイとんで快良い秋晴れが続いて今日も北風がはは 太平洋の方からすき間風のように小笠に流れ込むヨカバツテン県出身の相棒と交代して肌を冷し乍ら俺も年頃になつた。この夏会社のバスで須磨に海水浴に行つた時結婚を前提としたかせんかは知らんがアベツクの群や赤や黄の海水パンツが目にしみた。さて俺の彼女はどこにいるやら、そして彼女を選ぶとしたらリンゴ畑の丘に眠る優しかつた母のよ

うな女性を。子供は二人男の子を、私のように太くて短くないように写真で見る父のようにスマートな子をと、一人空想をえがいていたら釜たきの元老が一人寝る夜の明ける間はいかに久しきものとかわしるが。どうだズバリだろうと俺の空想見すかすよりに秋、秋もの思ふ秋人恋う秋いざ来にけりかトニコにして通過ぎる、どれ一服吸うて背中迄汗を通してカス引いてる相棒のサツマイモと交代して後に続く者のために働き易い環境を作るよう会社に反映さすため頑張るぞ、南海の父よ北海の母よ。

一九六三年九月



青年

青年と云う言葉は実に良い響を持つてゐる言葉だと思ふ。

大人がうらやむ言葉で少年が早くなりたいと思ふ言葉である。

僕は青年であるが青年と云う自信がない。

やりたい事も出来ず只惰性で動いてゐるにすぎないように思われる。

青年が自分の本心で動けないと云う事は青年でなくして老人である。

老人の中にも自分のやりたい事を実行してゐる人もゐると思ふが？

本当に青年が青年として生きていけるようにみちびくのが本当の大人であり本当の大人の話聞くのが本当の青年であると思ふ。

僕は本当の青年になり本当の大人になりたいと思ふ。

機械 大倉修二

懸賞問題

(問題は14・15・16頁に掲載)

応募は種目別に解答を記入し、所屬、氏名を明記して教宣部員に提出して下さい。

各種目別に正解者二名に賞品を贈呈します。但し正解者多数の場合、厳正な抽選で決定します。尙こんなやさしい問題は正解者が多いだろう、と解答を寄せて頂けないこともありますので奮つて御応募下さい。

締切日 10月12日
発表日 10月15日

食堂に掲示します。

考えよう

毎日の労働御苦勞さんです。

通勤、書寝の一時〇〇を読んで楽しんで下さい。

エー秋風やわ肌に感じ男は女を、女は男が欲しくなる結婚シーズンとなりました。

老も若きもレジャーを楽しみ、又ネオンの光の梯子酒に楽しかるべきはずの美男美女よ、皆さん楽しく仕事が出来ておりましょうか。

お母さん、労働者御苦勞さんです。朝食、夕食一家の団樂に食事を週何日あるでしょうか。

お父ちゃん今度の日曜野球に行こう！”え”又会社かいな。父ちゃんは朝は知らんが夜遅く帰り、早よ寝云うだけで隣のおつちゃんのように風呂も一緒に行けんし、映画もつれて行つきよらん。たまの休みは寝てばかりや！

会社でそれ程良い所か？十二時間もいる所だからな。一度見学に行こう、皆さん実態はどうですか。子供の参観を実現しますか。昼休みは路面にムシロを敷き、二三〇分の時間も寝る疲れた体で早出残業を重

ねる理由は”何か”

色々に異つた理由、意見があります。

”働ける時に公出残業で金を貯めな、金があれば好きな事出来る。その為病氣になつたら？

”生活に追われ家賃に喰い込みやつて行けない。

”自分等の日給は高いのか、安いのか？定時で

”親子三人で四畳半の生活は寝ぐるしいから。

”自分等若い者は安定した（老後まで働ける会社）落

付いた生活が出来るようにしたいのだ。

”自分等何年すれば文化住宅にでも入れ、結婚が出来、

又子供も作る事が出来るのやろうか？

”若者の希望の声は種々あるうが何如にしたら、どう

云うようにしたら解決へ持つて行けるのか。

”考えましょう、そして実行に向いましょう……。

”何の為の組合があり、又職場集会があるのか。

”何の為に組合費を多額に出して知らん顔するのか？

”会社には休憩所もあり娯樂所あり、力一パイ働いて

通勤電車、バスにもまれても温たかい食卓が待つ家

庭に帰る方法も幾等でもある。

皆さん！

”考えよう！そして実行しよう！

帰郷



私は物事をする場合、一応脳裡で概算を立てその上で行動する事が好きだ。

例によつて田舎に帰る時もそうだった。下宿で行動を考え大阪駅に向つたのが九時三十分多多少早いが買物に「余りの時間」を残していた。三番ホームに西海号がつかれたように入つて来た。私は人垣をうまく抜け、車中に入り前後の空席を探すが生憎と殆んど満員だったが、私の右に一カ所空席があり、今日は日によつほど良いのか？ いや今度の帰郷はついていると思つた矢先、前の席に喜んで笑つていた若い男女がぐいと私を押しつけて窓から顔を出した。「いろいろ有難う」「元気で行つて来ます」モニターング紋つき姿のホームの見送り人に手をふつている。

私は乱暴に押しつけられて「何んて無作法な女だ！」と少し腹を立てていただけに（新婚旅行のアベックか）と私は啞然とした（何と勇ましい花嫁さんか）

しかし、いずれにしても新婚さんの前はまずい、先方も照れくさいだろうし、それよりも私の視線のやり場に困る。私はもう一度中腰のまま前方に空席を探すが駄目、あきらめ腰を落ちつけたが、さて困つた、目をもつていく所がない、窓の外を眺めていれば不自然だし、ねむくもないのに目をつむつていれるのもつらい。二十分もたたない内に首筋がこつて来た思い、ついにバックを開けた。駅で買った週刊誌に目を通すことにした。新郎新婦の会話が今度は耳に入る（イチナンサツテ又イチナン）私の心境はほのかにねたましさを覚える。同じ年頃の空気を吸つて一体自分は何をぼんやりしているのか。その時「あいているんですか、ここ？」ハアと返事する間もなく隣席にすつと腰をかけた白い洋服の若い女性だ。何と云う布地なのか私は知らないがひどく高価そうな洋服でそして美人だ。ツンととりすましたほほのあたりからブンと香水の匂が漂う。私の思惑は見事はずれ「佐世保まで行きます」と先手をうたれた道中、その人と楽しい車中をすごし田舎に帰つた。

労資共同で企業防衛をやれ

小釜 火木津

我が大阪亜鉛労働組合も生れるべくして生れて、この夏第五回の定期大会を迎えた。省り見るに、実に創立以来誠に多事多難労資絃々相摩して斗争に次ぐ斗争で過度期に有勝と云え静かに反省すべき秋であろう。

我々は実力過信の余り直ぐ伝家の宝力を抜き、今次春斗では遂に大上段に振りかぶつて皮を切つて肉を切られるような結果を身にしてみても体験してしまつた。官公庁や大企業ならとに角、我々が寄る所の企業の実態を認識して企業にマッチした組合運動を進めねばならない。我々が骨肉相食むような泥合戦を演じてる間に末組織労働者で運営されてる同業者に我々の生活向上の糧が食われているのだ。今こそ企業に立脚した労資関係を打ち立てる時である。あろう貿易の自由化がどうの、ドル防衛がどうのと難かしい事は判らんが今日ジュース一本位の値うちの株価の船会社

を相手にして常に戦わずして勝つ戦法で好条件で問題解決して全日本海員組合は時には一歩停止二歩前進して斜陽産業のNOIの海運界と共に生活の向上に企業防衛に共同戦線を張つて国際競争から落伍しないよう努力して事を他山の石としなくてはならない。斗争の親玉のように企業界から見られてる総評の太田議長は貿易の自由化に対応する論説の中に斗争至上主義の戦術転換の記事をいつか見た事は記憶に新しい。

要するに不調の母体から美味なオツパイが出ない事位我々は穴の奥からオギャツと飛び出した時から知つてる筈である母体を健全にして我等を背伸する工夫する秋が来んのだ。

今次春斗の様相今一度繰返さんか、日に日に苛烈を極める同業者の攻勢に苦杯を喫する事、火を見るより明らかであろう。労資双方大いに反省して労資相互信頼のもとに企業防衛に共同戦線を張るべきである。



我々の時間をもとう

一日は朝の起床から始まるが、一日の労働者としての時間はまちまちだ。当大阪亜鉛支部は作業実働十一時間、拘束時間なら十二時間、半日が会社だ。

我々が社会人として自由な時間はスイ眠時間をのぞけば二時間乃至四時間だ。現在アメリカで三十六時間制が一週の労働時間とさければ、ILOでさえ週三〇時間制を、全世界の労働者に勧告している。

当大阪亜鉛は週六十三時間制だ。せめて残業を規制して最低の週四十八時間制をしかねば我々の生活性の向上はとうてい望めない。一つの実例を示して、いかに我々の生活がみじめか、一家団樂の時間がなにかを知つてもらいたい。

「一日を分割すれば、起床を午前六時出勤準備、通勤が二時間、午前八時から午後八時迄会社、そして帰宅が九時、午後九時になつて始めて自分の時間が持てる。新聞を読む、テレビを見て午後十一時に就床」。親子の対面は日曜だけ、その日曜日も一週間

のつかれて昼前迄寝てくらす、これで健康で文化的な人間としての生活が営まれているのだろうか。月賦の電気器具を支払うかたわらスイ眠不足をおぎなうために安酒で熟スイをと生活の苦さを悪循環をせざるを得ない。

子供を健全な将来のにないてとしての立場から教育していくことが我々に課せられた大きな課題の一つだ。それも出来ない者が親たる資格を有することが出来るのだろうか。低賃金の長時間労働者だからとか、中小企業の宿命といえればそれまでかも知れない。たしかに日本経済の二重構造がこんな宿命的なものを生み出すのだが、これをほつておいては中小企業に働く労働者はいつ太陽を見られるかわからない。組合の第一の目的が生活と権利を守るためならば、我々の手でこれを改善していかねばならない筈だ。その為には我々は目を大きく見ひろく必要がある。企業だけにとじこもつていてはいつまでも発展はない、もつと労働者意識に徹する必要がある。自分を中心にした生活時間の分割を打ちたててそれにそつて実践していくことだ。勿論今の低賃金では無理だ。そこにおのずから賃上げ、定時間で食える賃金の必要性が生じてくる。

会社は我々の斗いに応じて定時間で生産予定も数の
消化も考慮するだろう合理化やその他のいろいろの攻
撃手段を会社はとるだろう。それに負けてはならな
苦しい斗いではあるうが、明るい将来をめざして我
々の生活を守る為の斗いならくじけることもない。
労働者の時間を作りよりよき子供を育成して新しい
社会主義への国造りのためにも我々の手で早急に時
間短縮をかせげ立ち上がる必要性にせまられている。
長寿の為に社会保障の充実化も我々労働者に課せら
れた課題だ。

いろいろな問題と取りくむために時間の余裕をつく
つて勉強していかなければならない時だ！
一日も早く一日八時間を目ざして進みたいものだ。

若旦那より

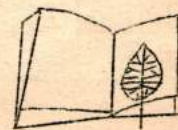


無 題

幸せを求めて空し春の夢
炎天の大夏 黙して語らず
淋しく去り逝く友 また如何に
初秋の涼風に一抹の悲哀
噫々これ誰の咎ぞ？

今ぞみる 亜鉛の息吹
たくましき力 建設の鋤
企業の躍進 我等の前進
永遠に築かん 諸共に

第二鍍金 中 筒



昔と現代



十一月二十三日は我々労働者の勤労感謝の日と制定されている。昔はこんな有難い日はなかつた。労働者は生きる為に労働するばかりであつた。現代の労働者は恵まれた幸福者である。まして社会発展のない手である労働者としてのほこりを尊く感じなければいけない。

一日の労働が生活の手段である事は現代も昔もかわらない。年中汗を流して働くのが美德と云われた時代はもう過ぎた。

定められた時間に能率よく働き、後は余暇を楽しむうでわないか。生産向上がもたらす労働時間の短縮は云うまでもありません。

昔と現代はここにもかわつてゐる。

私達みんなが職場のムダ、ムリ、ムラをなくして仕事のしやすい環境をつくることに努力すれば、やがて能率が上がり、生産性もあがるはずです。生産性の向上により利益は経営者だけがうるおすものであ

詰め将棋



第二回 中級問題

「ヒント」 二枚角の攻撃を二枚飛車の守備との接戦です。飛車の利き筋を巧みにはずして、角の成り込みと捨駒の工夫が必要である。

(持駒) 金 金

九	八	七	六	五	四	三	二	一
			飛					皇
				飛		角	王	
		歩					歩	
			歩	角	●	▲		歩
		歩		歩			歩	
			歩					

つてはならない。当然経営者もわけまえにあづかるし、労働者の賃上げ労働時間の短縮にふり向けられる、そこで労働者はウンと働いてウンと遊ぶ、労働者の要求はこのように変わりつつある。

労働者も人間である以上いくら高い賃金をもらつていても人生を楽しめないうし、やがて仕事の能率にも差支える。

たまの休日はゴロ寝で疲労回復にせいいつばいというのでは何んの人生も楽しめない。やがて仕事の能率にも産支える。

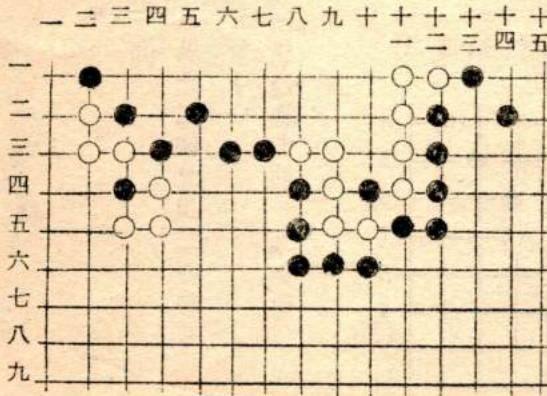
この二つがととのえば国民生活の安定にもひびく、むかしのようになだ働くだけと云う習慣を捨てて仕事の能率向上を図るくふうをする必要が十分にある。人間はもともと労働がきらいで活動が好き、生きるためにやむをえず労働し、お金さえあれば労働なんかほおり出してスポーツや趣味などの遊びに熱中しだす。もつとも始めは生きるために労働するが、動物的な欲求が満たされると今度は虚栄心が頭をもちあげてくる。人なみにテレビ、電化製品一式、あるいは自家用車がほしくなる。そこで労働にいちだん力を入れるようになる。そこで労働にいちだん同僚を意識してお互に競争してすこしでも上役から

詰め碁



第一回 黒光

黒第一着手に好手を考えて白を殺して下さる。



解答は符号か図で記入して下さい。

認められ出世しようとする。

やがて人間的欲求が満たされると地位や名譽がほしくなると、もともとイヤなはずの労働が生がいをおぼえて、働く、働く。人間の本性を忘れて労働する事になる。私達労働者はダラダラ仕事を続けて一日ですむ仕事を二三日もかかっている。労働者が多い働く人はこの際労働に対する認識をあらため勤務時間をフルに働いているがを、すなおに反省してみよう。

そうすればお茶をのむ時間、タバコを吸う時間、雑談する時間などムダに過す時間がいかに多いかに気がつくはず。私達現代労働者は現代を楽しく築いて行きたいものです。

一一釜 三原



詰め連珠

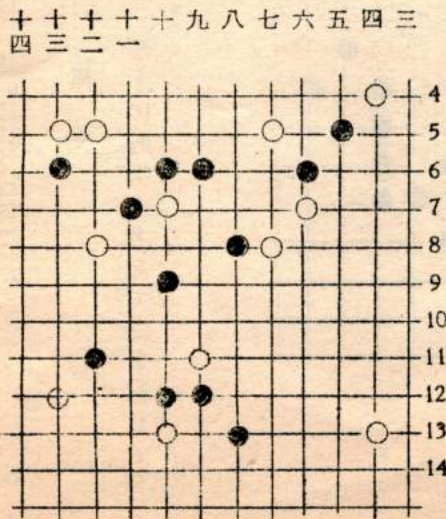


第一回

黒光二珠で四三の勝ち

「ヒント」

黒の勝ち筋 九ヶ所



解答は符合か図で正解だけを記入の事。

思 索

台風のシーズンともなれば誰しも被害が少ない方が
良いと思うのであるが、文明が進むに従がつて台風
の被害も大きくなつて来るので台風の事について少
しても知つて置きたいのが人情です。まず台風が来
たと思つたら風を背にして左手を上げる。その方向
が台風の中心であるこの法則を「バイスバロット」
の法則と云うので台風が近づくに従つて風向も変つ
て来るので戸締等もその方に早目に出来るわけです
からこの法則を利用して被害を少しでも少ないよう
にしたいものです。

二 洗 居 士



白 魚

矯正 中村良樹

宿へ行く道は桜並木であつた。土堤下の小川は草原
化して、水の流れている川面は二間ほどしかなかつ
た。小川は浅く、清く川底の砂がよく見えた。

私は見はらしの良い部屋に通された。外は美しかつ
た。窓に寄りそうようにして、部屋の前に広がつて
いる湖を眺めていた。知らぬ間に小舟が視野にはい
り、去つていく。私の他に泊客がいないのか静であ
つた。宿が余りにも大きいので、少しとがめられた
が、この宿一軒だけが町からはなれているので私を
心よくした。

私は旅の疲れが出たのか良く眠つてしまつた。目覚
めた時は朝の寒さはすでに去り、時計の針は十時を
さしていた。洗顔をすまして廊下に出るとお手伝さ
んが私に気づいたらしく、ぞうきんがけをやめた。
「あらお目覚ですか、ちつとも知りませんでした。
すぐお床かたづけしますから」バケツをさげ、声の
こして去つていく。お手伝さんは十八、九であつた。

えりあしが青く美しく私の目を引いた。私にはお手
伝さんよりも少女に思えた。少女の言葉は田舎なま
りのない美しいひびきをもつていた。

宿の前は小川とも湖ともわかりかねた。枯葦が風に
なつていた。私には枯葦のなつているあたりから、
湖だろうと思われた。岸边に立つていると、白魚が
十数匹水面をのぼつてくる。私は春を感じた。白魚
ののぼるほど水もぬるみはじめたのかと、改めて閑
そな田舎町を眺めると、急にバツと明るくなつたよ
うに感じた。

白魚の川面の群に旅の春



わが家の実験

- 寸法のそろつたタオル三枚を耳を一センチ重ねて縫い、それをフトンのえりにかけて寝ると冬は暖かく、夏は洗濯に便利、子供の昼寝にかけたり湯上がりタオルにもなります。
- 畳をふく時はタオルを使うときれいになります。糸玉が多いのでゴミが取れるし、畳を傷めません。スをつけてふくといつそりきれいになります。
- 砂糖につくアリを防ぐには砂糖つぼに輪ゴムを五六本はめておくと決してアリが上つてきません。
- 機械油等でよごれた作業衣は住居用洗剤を〇五〇位湯にかして洗えばだいたい取れます。ひどい汚れは食器用洗剤と磨き粉でもみ洗いすれば落ちます。

田
中

言葉の効用

大阪、亜鉛K K 小釜

山元利助

不満足と言う言葉がある。人から物をもらつたあの人は外にも良い物をもっているのにこれでは不満足だ。この外、不平、不満、ぐち、やきもち、本当にいやな言葉である。

こんな言葉は無い方が良いと思う。けれども言葉としてある以上、何か必要があると思われる。先ず不満足という言葉、不満足と言う心がなかつたらどんな結果になるでしょう。

昔印度の国に大富豪があつた。男の子が生まれたので其の土地の習慣にしたがつて、数々の神々を七日の名付の日に招待して、知恵の神には知恵をさずけてもらい、力の神には力をさずかり、其の外色々の神々にそれぞれ力をさずけてもらつたけれども、其の父は不満足という言葉は真からきらいな為、此の神だけは招待しなかつたのである。

さて、其の富豪の子が段々と成長して、青年壮年期に達して色々の神々からさずかつた力により、何

事も人並以上に出来て、非の打ちどころも無いのにおかしな事に他の人は段々く出世していくのに、その大富豪の子はいつまでたつても出世せず、一定の地位に止つて向上しないのである。

父は不思議に思つた。この子は八百万の神々にそれぞれ力をさずかつて、何不足ないはずなのにどうして成功しないのか、あまり不思議に思い、国の聖人を尋ねて教えをこうたのである。

ところが其の聖人の言うには、大富豪貴方は此の子の生れて七日の名付祝の時、八百万神々の中の不満足神を招待しなかつた。それ故にその力が欠けている為であると、そこで大富豪は何でいやらしい不満足という言葉、不満足心が出世向上のさまたげになるかと重ねて尋ねた。聖人が言うには、不満足心は無くても満足心はある、外の心はみなそろつているので成功も向上もする素質はそろつていゝ。しかし一定の地位まで上ると、その地位に満足してしまふのである。他の人は其の地位にも不満足心をおこし、向上心を起して上に上にと地位も向上し成功していくのである。

この子は力はあるながら、其の地位に満足して、その地位に不満足だ、もつと向上しようと言う心が

起らないのである。

其の為出世も向上もないのであるとの教えであつた。何げなく深くも考えていない日常の言葉にも、このような効用があるものでしょうか。

増上慢は芸の行き止り 小さな成功に満足して大成を忘れたおろか者の事を教えた例え話と思われます。

さてふりかえつて自分達各人はどうでしようか。少年、青年時代は大志をいただき、希望に満ちて人生の船出をするのですが、世間の荒波はそんなあまいものではありません。

大きな望みも世間の荒波にもあそばされて中位になり、やがてうたかたの如く消えうせて、その日その日の無事を心に願ひやる他ない。

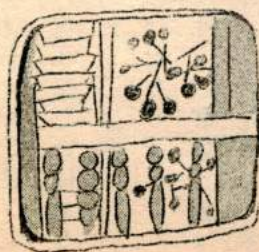
不満足を無理に満足してその日を送っている人が多いのではないでしようか。これが小さな満足にとらわれてだらくしていく姿ではないでしようか。

大いに不満足の内を起し、今日より明日、日に月に向上心を起し、今日の不満足を明日の満足にかえていきたいものです。

明日の不満足は又明後日の不満足に、限りなくこの不満足の内を使いきつていくところに向上の道も

開けて、不満足という言葉の妙味もこころゆくまで味わえるものではないでしようか。

文明開化の世の中も、現在の文明に満足して不満足の内を忘れたら世の中の進歩発展は止つてしまします。現在の文明にも不満足の内を起し、研究に研究を重ね、努力を重ねていくところに発明も生れ、日進月歩の榮ある社会も一にこの不満足の内を有意義に使いきることと確信するものであります。



青年層と思想

青年部員

「思想」これは思考作用の結果生じた意識の内容であり、實際生活と密接に關係し、その生活を支配、固める、広い考え方、方法である。

これでは國語の辭書の写しである。又これは幹である。我々はこれに枝葉をつけて、木、林、森を作らなければならぬ。そこで枝を探した。

憲法で定められた「あらゆる全の自由」の中の思想の自由であると思う。これど幹枝はそろつた。

その木に葉をつけよう、童話の花さかじいさんでない僕、平凡が青年が葉をつけようとするのである。

その前に枝と解く自由なるものを分析し、それに応じた葉を、松には松葉、桜には桜の葉を、我々には我々の道をそれぞれつけると共に導き出そう。

我々は人間として、原始本能が満足される事を要求し欲している。その表われが社会生活上から発する強制に対する反動、自分自ら屈しなければならぬ。他の意思に対する反抗であり、支配される苦痛

に対する抗議である。

これらが自由の発生であり、自由を要求する上において、社会に対して反逆する自然であり、原始本能である。

これに基づく要求、抗議反動が常に労働者により広範に斗われてきたのである。

自由を強調する側面には必ず平等があり、権力的観念性にはこれを民主主義として、自由と平等とが結合しているのである。

理論上、人という立場は平等であるという前提のもとから、吾人は他人を支配してはならないということが導き出されるし、又反面、歴史は人が實際に平等であるように欲するならば、吾人は我々自らを支配しなければならぬという事を教えた。

それでは社会はどうであろうか？ 資本家は我々の労働の剰余価値を独占している。

又中産階級（商人、農漁民）はあまりにも日和見的である。それでは我々労働者はどうか。

無産階級と唱われ、資本家の利益追求の手先とされてきている。これらの事実をもとに哲学者マルクスは自由と平等が永久に与えられるのは労働者独裁であり、人民独裁にある。との結論に達し、万国の労働者

働者よ團結せよ」と呼びかけたのである。

つまり、歴史がおしえるように我々は我々を自らの手をもつて支配しなければならぬのである。

その出発点は資本家への国家独占への自由と原始本能の要求である。

その要求の基礎となる資本主義社会での行政は、皆さんの知つての通り「貧乏人は麦を喰え」であり我々を苦しめ、悩ましめた高度成長政策であり他国侵略等である。

自由がどのようなものであるかを見たが、これで充分であろうか。我々には思い出される言葉がある。

リンカーンの人民宣言であり、平等である。

この本質である相手を認め話し合うということである。自由と平等とが同一でなければ、何物、何事でも自由としての名に値しないということを知つた。

そしてその根に互いに精神面に意志を合い通じ、互いに歩み寄りなければならぬ。

その共通な地盤がある事が知らされ導き出される。

我々はある物事の現象のみ見るのでなく、その本質はどうであるか、正体は何んであるかを見極め、歴史はどうであつたか、現状ではどうであるか語り合いたいものである。

これが團結への一歩であり、多くの仲間と手を組めるのである。その語り合いも自分の意見を繰り返して述べるのでなく、仲間の考えている事を聞き、相手を認め、その物事の真理の究明へと一歩一歩前進し、どこまでも問い進み、我々の求める頂点へと進むべきである。しかし人間は皆、自分を正当づけようとする傾向がある。

自分に敵対する力に対しては、力量又は道徳的關係によつておさえようとする傾きがある。

しかし我々労働者階級は知つておかなくてはならない事がある。それは即ち資本主義社会では、常に残つた者に、正しい道が、成功が正しさを証明してくれるように思われ、時代の波に乗つた人は正義人道の真理のもとに立つたような気になつてゐる。

反面挫折する人々、不況や事件によつて踏みにじられた人々等に対する社会の盲目的な動きがあるという事である。

前に自由平等を書いたが、それでは現状ではどうか、いかにも憲法には自由平等が唱つてある。

それもアメリカ帝国主義と日本の大資本家、あるいは国家独占機關の意志あるいは許可によるものである。我々が勤労に誠実である以上、この事実は忘れ

てはならない事実である。

ここで「自然に帰れ」という言葉を思い出そう。

それは「自然な自由社会に帰れ」という事と思う。つまり、我々は社会建設の為に働いているもので、決して資本家のものではなく、自由社会の建設の為にあり、あの無慈悲な相違はなく、又社会の盲目的動きすら見当らない、社会建設のためである。

以上、我々社会相互間の著しい相違をみた、この相違を出発点として承認し、社会革命の道へと進まなければ語り合いの意味をなさないのである。

その相違の本質は歴史が示した通りだ。

我々は労働者だ、これには決して相違も何者もない、ただあるのは幹になる我々の思想であり、経済と社会的地位の向上である。

歴史が示したその相違の本質というものはどこにあるか、それは現実の社会、資本主義社会にあると云つても過言ではない。

資本主義社会での相違は、資本家と労働者、資本主義国と資本主義国等相互間の力関係にある。

愛社心、愛国心なるものを教え、労働者我々をスーブのだしの様に使いしほりつくしているのである。矛盾の解決、斗いが、つまり資本家への反抗が自由

への出発点であり、社会革命であり、社会主義革命への道である。

以上のことで我々相互間の矛盾は、我々の社会にあるのではなく、搾取の成立する資本主義社会にある事が解つたと思う。

社会主義革命に成功した国々、又は進行している我々の仲間達により、徐々に資本主義社会は葉がなくなり、枝がなくなりつつあるのである。

最初に述べた葉をつける話は皆の力で仲間達の力で幹に枝が、枝に葉が、葉に色つやが出てき、木から林へ、林から森へとなるのである。

以上のことから我々青年層は、これからのようにあるべきかを問うに、これからの日本は、いや世界の状況は「人の上に人を作らず人の下に人を作らず」の福沢諭吉の言葉の通りなるだろうし、又なりつつある。

その力が我々青年層だし、その根本が組織だと思ふそうすると、必然的に未来は青年のものである事がわかるし、時代の進展は早い。

明日は、いや今日は昨日より何らかの収益をと個人は思うにちがいない。

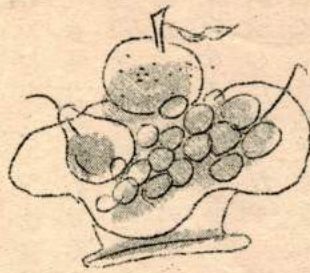
我々労働者も時と同時に進み、又は敵対する資本家

も進んでいる。しかし我々は最後の勝利を知っている。又彼等を足ふみさせる方法も知っている。

「團結」だ「力」だ

・ 團結の力で明るい社会を作り出そう・

最後に我々は、我々の為に我々の仲間と手を組み團結しよう。



戦争と俺

加川俊三

向つて右肩に第二十師団、左側に朝鮮平壤歩兵第七十七連隊、中央に祝入營 加川俊三君と大書された高張提灯が二基明るくかがやいており、提灯と同じ文句を大きく染め抜かれた旗のほりが、提灯の左右に二十流もあろうか誇らしげに風にはためいている。高張提灯の中央少し奥につけられた門燈のあかりに照らされて、右に中将湯、中央に大きく「ゆー左下方に末広湯さん江、と染め抜かれたのれんが風にゆれている。

下町の銭湯であり、俊三の家である。

そののれんを頭でかき分けて、肩にタオルを左手に石鹼箱をもつた青年が出てきたが、四間道路の中央に、かんがい、深げにたたずんでいる俊三をみると、やあ俊ちゃん、いよいよやなあ、と声をかけながら近寄ってきた。

うん、とうなずいて俊ちゃんは思わず二階を見上げ

た。六畳と八畳をぶち抜いた二階では三味線パヤシもにぎやかに、俊三の入営を祝う町の有力者が、今や無礼講の呑めや歌えの真最中である。

福原遊廓の芸者が五人呼んである。つい先刻まで大マジメな顔で俊三君の入営を祝う祝辞を述べていた町の有力者達がハメをはずして大さわぎしているのである。俊三もさきほどまで同席していたのだけれど、うれしいような悲しいような、なぜかしみじみした気持で今自分の入営を祝つてくれる人達のことくしみの心を改めて自分の胸にしつかりと抱きしめるように、自分の名を記した提灯や、旗のほりを感慨深くながめながら、夜の路上にたたずんでいたのである。いま俊三に声をかけたのは田中正次郎といつて向いの焼芋やの長男であり、俊三とは小学校で机を並べていた親友である。

今年の七月炎暑の頃、共に神戸武徳殿で徴兵検査を受けた仲である。俊三にくらべてはるかに背も高く体格も立派な正ちやんは第二乙種になり、背もようやく五尺二寸五分の俊三が「先年迄は五尺三寸以上でない」と甲種合格にならなかつたのが今年から「昭和十一年」五尺二寸五分に改正された「恩恵？」に浴して「甲種合格になつたのである。」

うん正ちやん俺おどろいたぜ、四十人程来てくれるんやけどな化粧樽一丁（四斗入酒樽）あけてもうてあと二十本買うてきたけどまだたらんゆうてな、ときちやんまた酒屋へ走りよつた。（ときちやんというのは下働きの今年二十才の女中さんである）

ふうん、ものすごいやつちやなあ、と正ちやんも二階を見上げています。

おい、正ちやんもうすぐお別れや、一パイいこうか、俺、今日はうなるほど持つとるんやで、

よつしやちよつと待つてくれ、石鹼とタオルを置いてくるからな、と正ちやんはすぐ前の自分の家のガラス戸をガラガラと大きな音をたてて奥へ姿を消した。俊三は胸を張り、すつきりと晴れ上つた星空に向つて大きく深呼吸した。

昭和十一年十二月枯葉舞う師走のことである。朝鮮部隊は一月十日が新兵の入隊指定日だつた。

・オンシ、これ、ナンズラ、と卓の上から何かをツマミ上げたものがある。なにげなくふりむいた俺はワツハツハツハツハツ 思わず吹き出した。

なんと彼の手はいや指だ、オンポロ軍服の袖口からかろうじて出ている三本の彼の指先にぶらさがつて

いるのはバナナ二本分の房だった。

「その後も彼ははずい分と話題をふりまいたものである。彼はいつもいつていた、オラ、今迄こんなうまいもん喰つたことない。

彼は正直だった、最初バナナに驚き、ピフテキにオドロキ、ブタ肉に驚き、厚肉に驚きとオドロキ続けた彼は遂に云つた。オラ一生軍隊に居りたい、と

純情であつた彼も今は亡き靖国の勇士である。

北支の戦争に転戦中、決死隊として俺と同行し、俺の腕の中で死んだ。

彼については語りたいたことが多いが後日にゆずる。

彼は戦死する瞬間まで俺を、オンシ、と呼んだ。

この方言、オンシ、のために古参兵からどれほどしかられなぐられたことか、けれど彼は最後迄オンシ

「オマエ或は君の意」と云う方言を捨てなかつた」

「なんとも珍妙な彼のかつこうである、今日の朝入営した俺達は、それぞれの中隊、内務班に分けられ

俺は第七中隊第三内務班に所属し、陸軍歩兵二等兵になり、軍服一式三着分を支給されたのだつた。

一番上等の服は一装用と云つて戦場に赴く際のものであり、次の二装用は外出用だから、今着ているものを作業服とも三装用とも云うものだそうである。

二装用はどうか体に合つたが、軍帽には参つた。俺の頭につけると目の下までくるのである。

さて、いまの俺のかつこうは彼に劣るものではないが鏡のない有難さに、自分は見えないのでお互い指をさし合つて笑いころげたのである。

突然、敬礼、という飛び上つてピツクリする程大きな声に迎えられて、俺達の班長として昼間紹介された大田軍曹が入つてきた。

俺は昼間古参兵に教えられた敬礼を思い出して右掌を耳の辺に挙げたら、ちがうと怒鳴られた。

俺、加川俊三の叱られ始めたつた。

やがて彼は皆に着席を命じ、訓辞を始めた、お前達も今日からは名譽ある皇軍の一員である、陸軍歩兵二等兵だおめでとう。ではこれからお前達のための祝宴を行う、遠慮はいらんうんと呑め、と班長が右手に湯呑を高く挙げた。俺達もそれにならうべく卓の上を見て今更のように驚いたのである。

その品数量共に一人分のものとは思えない位のご馳走である。軍隊は一汁一菜麦飯だと聞いていたのに十種を教えるご馳走に酒一合尾頭つきの大鯛は目の下七、八寸もあろうか。紅白の幼児の頭程に大きいマンジュウもあり、加ふるにめしは純白である。

命令と大声でさげんだ班長は胸をはりふんぞりかえつた。俺達は各自寝台の前に直立不動の姿勢をとり、敬意を表した。班長はなにかの書類を目の高さ
に奉げもち、三木上等兵 ハイ お前には加川二等兵 ハイ 吉本二等兵 ハイ この二人を戦友につける。めんどろみてやれ、ハイ 花山一等兵 ハイ 浅井二等兵 ハイ お前達戦友だ ハイ 次ぎ次ぎと俺達新兵第三班員十五名に古参兵の戦友が命じられてゆき、ベチカの火はあかあかと燃え熾り、窓の外には零下二十度の寒風が吹きすさんで、二重仕切りになつた兵營の窓は白く凍りついている。
入營第一日目の点呼である。

夢夢うつつの俺の耳に、かすかにラツバの音が聞える。きさまら、と雷鳴の様な怒声にハツと吾れにかえつた俺は飛び上つてベツトを離れた。

今日は一月二十一日俺は思い出した。お前達十日間客として取扱う、その間に軍隊生活に慣れておくんた、と親切でやさしかつた古参兵が、約束の十一日豹変したのである。

販揚げに出よ、週番上等兵殿の声も昨日迄とは違ふ、

俺は驚き怖れた。

その日から各内務班共、古参兵の怒声と共に新兵の頬に掌がパンパンと非人道的な音を立てはじめたのである。

演習に整列ツ一 週番上等兵の声を背に俺は食器をぶらさげて走つた。炊事場へ食器返納のためである。零下二十度の寒風が耳をちぎりそうだ。

各班から二名づつ全員十名の新兵はただ走る、敵は炊事場だ。炊事場には鬼のような炊事軍曹が仁王様のように立ちはだかつている。

第七中隊食器返納に参りました、と呼ぶように報告すると、よしと答えてくれるが、声が小さいと大変である。ようやく食器返納を終り、走つてかえつてみると、新兵、古参の別なく玄関で靴をはく兵が混雑している。俺は内務班に飛び込んだ、トタン貴様と怒声が飛ぶ、ハツとした俺は廊下にトビ出して、第三班加川二等兵只今食器返納より帰りました。よしトビコメ ハイ ドスンである。

大急ぎで帯剣をつけ、背のうを背負い銃を右手に靴を左手に玄関へ突進、靴をゲートルをつけ舍前に出たら、噫々ヤンヌル哉、分秒の遅れ、番号の号

令に一二三四五六と呼称する兵、その後方に息せききつてようやく並んだ俺は三十四とさげふ、後に続く炊事場帰りの連中も三十五、三十六、

整列に遅れた者一步前へ、班長の怒声が飛ぶ、声もなく俺達は一步前進、なにしとつたか、ハイ、食器声の終わらぬうちにバン、バン俺の両頬が鳴る。班長は根気よく十人の頬を一つづつ鳴らして廻る。俺は二つだ。

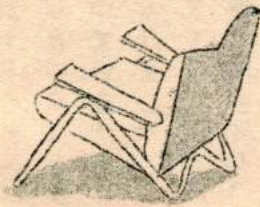
待ちに待った消灯ラツバが鳴つた。俺はうなぎ床にもぐる。体中の骨がバラバラになつたように痛みホキホキと音がする。

加川としのびやかな三木上等兵の声、ハイと俺が答えると、声もなく俺の手に紙袋をにぎらせてくれる。カサツと紙の音がする。

吉本とトナリに寝ている吉本二等兵をよぶ、しのびやかな三木上等兵の声とともに、カサツ、とかすかな紙の音がする。ウツと熱いものが胸元へ突き上げるのをぐつとかみしめながら俺は袋をさぐる。

連隊名物の、栗マンが五個、俺の心臓をしめつける。気が遠くなるような良い匂いがただよう。夢中で口へ、美味イ、これ程にうまい、まんじゅう、も五個

全部食べ終るまで俺の体は目をさましておられない。三個目を口に入れたままねむつてしまつた。翌朝俺のベツトの中から、ころころ、と転がり出した栗マン始末記は次号に続く



執行部編成表

- 一、委員長 村上幸次郎
- 一、文體部長 多田武夫
- 一、厚生部長 江里口賢
- 一、調査部長 橋井美信
- 一、青婦部長 山元国清
- 一、財務部長 石井忠次
- 一、教直部長 保城幸夫
- 各 對 策 委 員
- 一、生産對策委員 村上幸次郎
- 一、勞銀對策委員 村上幸次郎
- 江里口賢 山口滿雄
- 橋井美信 中村宝明
- 保城幸夫 石井忠次
- 一、安全對策委員 江里口賢
- 山口滿雄 職場委員長
- 石井忠次
- 中村宝明
- 山元国清
- 一、給食委員 厚生部長 兼任

一、職場委員

- 一、釜 西浦栄蔵、黒浜 愛、堂園輝男
- 藤村左織
- 一、洗 綾野之治、石川清秀
- 中釜 折戸慶治、黒浜季明
- 二釜 大石 肇、村上勇次郎、三原健志
- 二洗 山崎一毅、井上一夫、竹本武士
- 矯正 蛭子 茂、田中次雄
- 機械 日高正由、岡田喜久夫
- 製品 藤川英敏、渡 行長
- 一、教直部員
- 部 長 保城幸夫
- 副部長 別府明治
- 一、一釜 田中一富、他一名未定
- 一、一洗 堂滿久義
- 一、中釜 久保勝彦
- 一、二釜 井筒福市
- 一、二洗 桜井健志 他一名未定
- 一、製品 野上 亨
- 一、矯正 森 正行
- 一、機械 大倉修二
- 一、検査 中川嘉寛

おわりのことば



原稿募集の際応募者に対して記念品を贈呈することを広告致しました。
誠に僅少のもので恐縮で御座居ますが、感謝の意を表すものとして、記念品を贈呈致します。尚、其の外別途に賞を贈り、労を謝すと共に編者一同感謝の意を表します。

創作賞 白煙流れ去る彼方へ

努力賞 青年層と思想

純粹賞 青年

編集子

春 雷 「第四号」

一九六三年十月 発行

大阪市港区南福崎町三ノ一

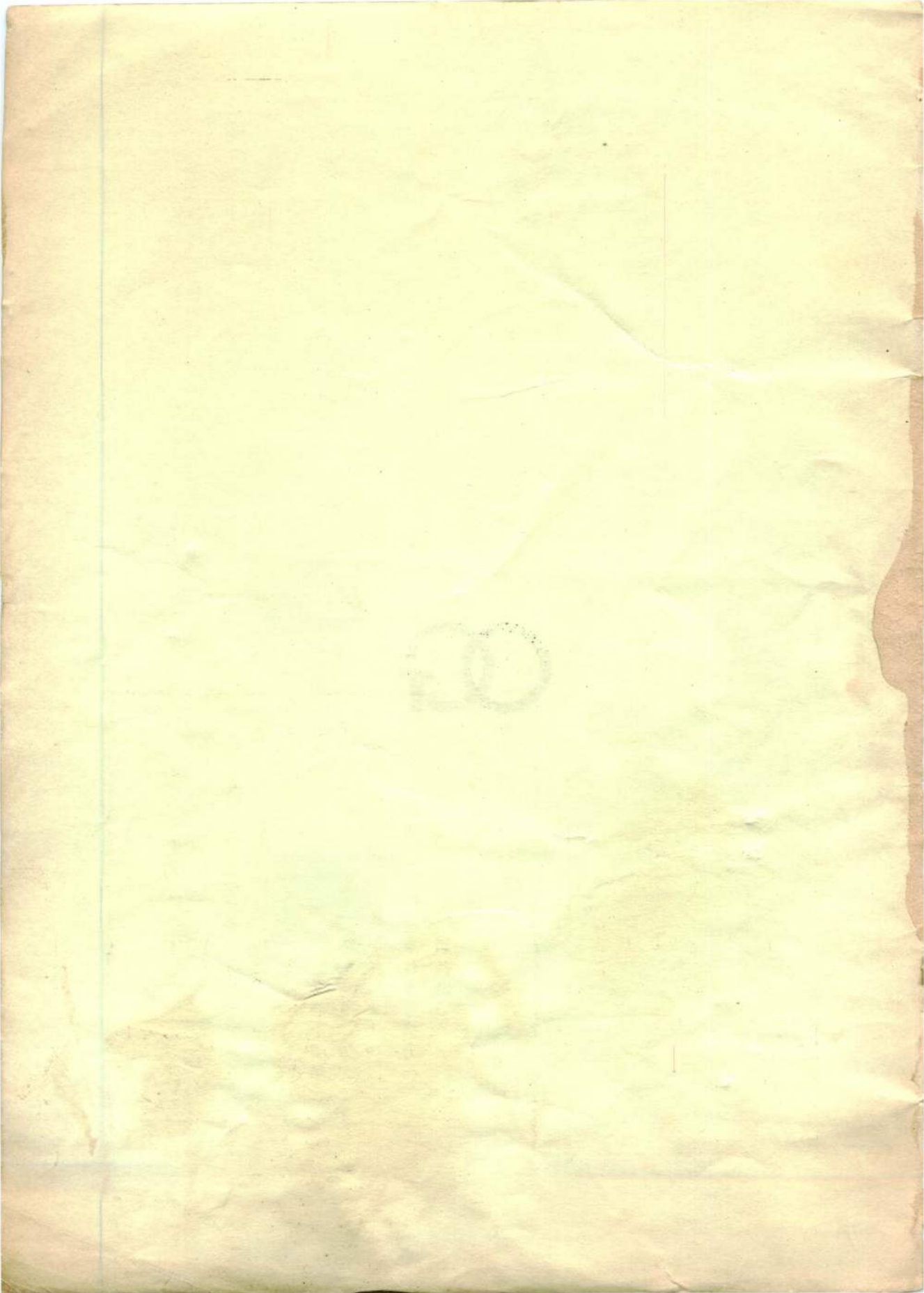
総評全国金属労働組合

大阪亜鉛支部 教宣部

大阪市此花区四貫島大通一ノ八

ホリグチ工房

TEL (46) 一八〇九番



OG